雛の館－資料７

古今雛（河北町紅花資料館蔵）

古今雛は明和（１７６４～）の頃に原舟月によって考案された、新型の雛であった。その流を汲んだ雛で、明治初期の江戸雛であると思われる。古今雛としてはシンプルな作品である。女雛の宝冠が失われているのが残念である。

古今雛（河北町紅花資料館蔵）

明和４年（1768）後桜町帝の時に、京都の人形師伊藤家を「有職御人形司」に命じている。有職雛の固定化した座雛へと変還していく。その後京都製の古今雛が誕生する。本品はそのころの雛で切目の刻、気品に満ちた作品で、高さ３５ｃｍの雛である。

立雛（須藤家蔵）

立雛は白い紙雛（白紙の形代）を色紙で作るようになり、さらに進んで立雛となる。

本品は、和紙に生地を貼り、呉粉等で絵付をいたしたもので、男雛の頭は冠と一本造りで胡粉仕上げとなっておる。この手は寛文（１６６１～）ごろの雛と推察される。男雛で２７ｃｍの高さとなっている。

古今雛（小和田 仁氏蔵）

古今雛は、明和（１７６４～７２）のごろ日本橋の原舟月の考案に端を発し、新型の内裏雛となって歓迎され流行していく。江戸で開発され、併せて京都でも製作される。本品は京都製で、顔は下ぶくれで衣裳もシンプルに表現されている。高さは２６．５ｃｍで、江戸末期の作と思われる。

享保雛（槙 孝弘家蔵）

内裏雛が年々精巧に作られ、女雛には天冠を置くようになる。しかも４０ｃｍ以上と大型化してゆくことになる。装束は金襴や錦地が主流である。

本品は享保雛の前期の作と思われ、男雛の後背に石帯をつけ、白い自然石で作られている。高さは４９ｃｍと大型のものである。

五人囃子（兼子昭平家蔵）

寛政前後に石井士彭が著

した「東都歳時記」に、少年鼓者と表現されており、これは五人囃子のことであると言われておる。従って五人囃子は少年の凛しい衣裳姿を表現されている。本品は江戸後期の作で、素袍姿で鳴り物を打つ手は上着をはずしており、可憐な姿をしている。高さ２５ｃｍ。

明治雛（須藤家蔵）

本品は、明治後期に造られた古今雛である。作者は京都の大木平蔵（丸屋）作の内裏雛で、衣裳（装束）も見事で、男雛の束帯は有職雛に近く典雅な容姿をしている。男雛は３０ｃｍの高さで、女雛の宝冠は美しく冠卓に別おきにしている。

五人官女（河北町紅花資料館蔵）

官女は、江戸後期に雛壇に姿を見せるようになる。１８２０年代頃、一陽斎豊国の描いた絵によって知られる。本品は五人官女で明治初期頃の作品で、ユニークな容姿をしており面白い。堀米家旧蔵のもので町に寄贈を受けている。

隨身（小和田 仁氏蔵）

隨身は、寛政（１７８９～１８００）時代に京都で開発されたものである。隨身は御所を警護する近衛兵であるため、弓矢・太刀を身につけた武士である。本品は王朝時代の服装（闕腋の束帯姿）を着けており、高さ２６ｃｍの江戸末期の作である。

有職五人囃子（細谷次郎家蔵）

江戸後期の寛政（１７８９～）ごろ京都で、有職の雅楽五人囃子が生れる。本品は平均して１１ｃｍの高さであり、向かって右から琴・龍笛・羯鼓・笙・楽太鼓の順となり、冠をつけた五人囃子は珍しく、芥子雛の一種である。

古今雛（河北町紅花資料館蔵）

古今雛は明和（１７６４～）時代に、江戸の上野池の端の大槌屋が考案し、人形師原舟月に顔を彫らせ原型を作ったのがはじめである。以後江戸中心に生産され流

行したのである。本品も江戸で作られ面長な顔と容姿が美しい。昭和初期の作で３０ｃｍの高さである。